



日本列島中部地域における農耕の成立過程の研究

著者	篠原 和大
発行年	2009-03-31
出版者	静岡大学
URL	http://hdl.handle.net/10297/4494

平成21年3月31日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2006～2008

課題番号：18520582

研究課題名（和文） 日本列島中部地域における農耕の成立過程の研究

研究課題名（英文） The study of the formation process of agriculture in middle Japan

研究代表者

篠原 和大 (SHINOHARA KAZUHIRO)

静岡大学・人文学部・准教授

研究者番号：30262067

研究成果の概要：日本列島中部地域の農耕の形成について、特に本格的灌漑水田農耕成立以前の実態を明らかにする目的で調査・研究を行った。特に、静岡市手越向山遺跡の調査では、弥生時代中期前半に遡る可能性の高い畠状遺構を検出した。このような成果を含めた分析から、本格的農耕導入以前に、小規模集団がある程度選択的に各種の農耕形態を受容したことが考えられるようになった。また、静岡清水平野の事例の分析などから具体的にどのように農耕が形成されたかをモデル化することができた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	800,000	0	800,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	360,000	2,360,000

研究分野：考古学

科研費の分科・細目：(分科) 史学 (細目) 考古学

キーワード：考古学 / 農耕 / 稲関連資料 / 灌漑水田耕作 / 静岡清水平野 / 手越向山遺跡 / 弥生畠作

1. 研究開始当初の背景

(1) 列島農耕形成期研究の新視点

日本列島各地に農耕がどのように導入されたかは、古代社会への革命的転換を解明する上での重要な問題である。

列島における農耕の開始は、北部九州を起点とする灌漑水田耕作の受容とその広がりによって求められてきたが、近年、縄文時代の多角的な植物利用、縄文後晩期以降の雑穀栽培利用が解明・再評価されるとともに、水田耕作

の技術的多様性が指摘されるにいたり、列島の農耕起源論は転機を迎えている。また、AMS法を用いた高精度 14C年代の年輪較正年代から暦年代を導く研究の成果が公表されだし、縄文・弥生時代を中心とする先史時代の実年代が大きく見直されつつある。特に弥生時代の開始年代は、従来考えられてきたよりも遡る可能性が指摘されるにいたり、日本列島の農耕導入期である弥生時代前半期は、従来考えられていたよりも長い期間で

あったことが予想される。したがって、この時期の文化とともに、列島農耕文化の導入過程が見直されることは必至である。

弥生時代開始後、西日本には比較的早期に遠賀川系の農耕文化が定着したと考えられる一方、日本列島中部地域においては、灌漑水田耕作を基盤とした大規模集落が成立し、農耕が社会的に受容されるのは弥生時代中期中葉であると考えられている。しかしながら、中部地方にもそれを遡る弥生時代前期から中期前半にあたる時期に、土器に見られる稲籾圧痕、プラントオパール資料や農耕と関連すると考えられる石器群などが検出されており、稲作に関する情報の「波及」とそれが社会的に「定着」する二つの時期の「ズレ」の現象として概念的に示されている。最近、この「稲作情報の波及と定着のズレの時期」が従来考えられていたより長い期間であったことが考えられるようになったわけであるが、現在、この時期の文化の具体像とその展開過程を明らかにすることは、日本列島における農耕の成立を考える上でも新しい重要な課題であると考えられる。

(2) 関連する研究動向と課題

本研究は、中部地方における灌漑水田農耕の導入より以前の農耕の形態を明らかにし、農耕の成立過程の具体像への接近を試みるものである。灌漑水田農耕が列島の農耕社会を方向付けたとする見方は支配的であるが、一方で、縄文から弥生へかけての農耕の転換を重層的に捉える見方が一般化しつつある。そこには、縄文時代における植物の管理栽培が明らかになってきたことや栽培植物資料の蓄積が進み、西日本後晩期にイネを含む穀類の栽培の導入が確実視されるようになったことなどが背景の一つにあげられる（宮本一夫「縄文農耕と縄文社会」『古代史の論点1』2000年など）。

本研究の構想にある農耕の重層性については、中山誠二氏が、稲作の諸要素の出現時期を地域毎に整理することによって、灌漑型水稲作の「波及」と「定着」に特に東日本に顕著なずれがあることを指摘している（中山誠二「日本列島における稲作の受容」『食料生産社会の考古学』朝倉書店1999年など）。一方、田崎博之氏は列島の導入期の水田形態に水利施設を伴うⅠ型と伴わないⅡ型を設定し、それぞれの細分によって列島における展開過程と地域に特有な水田形態を描き出している（田崎博之「日本列島の水田稲作」『東アジアと日本の考古学Ⅳ』同成社2002年ほか）。このような概括的な分析や地域的に恵まれた資料などから導き出された結論が、本研究の構想の骨格となっている。

しかしながら、特に中部地方では、灌漑水田農耕で考えられる道具の組み合わせ以外

の打製石斧などの生業具の分析は進んでおらず、水田遺構の検出が少ない中で、遺跡の立地・環境などから生業のあり方を分析する視角も確立していない。西日本や東北地方では、水田の検出例も多く弥生前半期の生業についてのある程度具体的な分析が進められているが（高瀬克範『本州島東北部の弥生社会誌』六一書房2004年）、中部地方でこうした分析が進められれば、列島における農耕の展開過程を構想する上で、大きな空白であった部分が補完されるものと考えられた。

(3) 研究の準備状況

研究代表者である篠原は、近年研究テーマを「弥生時代の農耕」に据え、所属機関から配分された研究費を活用しながら、資料の収集や分析を進めてきた。また、この間携わっている藤枝市編さん専門委員会委員（1997年～）や特別史跡登呂遺跡発掘調査指導委員（1999年～）の機会においては、地域の基礎的な情報を通史的に集めることや重要な農耕集落についての最新情報とともに、弥生集落や農耕に関する様々な知見を得ることができた。

さらに、2004年度および2005年度には、所属研究機関より研究費の補助を受けて、「列島中部における農耕成立の特質についての研究」（2004年度）および「列島中部における農耕導入過程についての研究」（2005年度）のテーマで研究をおこなっている。2004年度については、静岡清水平野周辺の縄文時代晩期から弥生時代前期の遺跡の生業形態に注目し、資料収集および分析研究をおこなった。弥生時代前半期に丘陵部での焼畑や丘陵縁辺低地での小規模な水田を含めた農耕を生業の一部として行っていた可能性を指摘し、その成果を発表した（「静岡清水平野における弥生遺跡の立地と農耕の成立」中部弥生時代研究会第10回例会発表要旨集、2005年）。また、静岡清水平野の農耕社会の成立を概観する試みもおこなった（「静岡清水平野に拡がる遺跡の語るもの」『静岡の文化』2005年）。2005年度には、静岡市内丸子地区周辺のフィールドワークを行い、丸子式土器文化に関する分布調査もおこなった。このような研究を通して、おもに静岡清水平野を中心とした地域の農耕成立期に関する資料収集と周辺地域との比較研究を進めてきた。

2. 研究の目的

本研究では日本列島中部地域の「稲作情報の波及と定着のズレの時期」の文化について分析をおこなうことを企図した。具体的に対象としたのは、東海地域の条痕文系土器文化、中部高地地域の浮線文系土器文化およびそ

れに併行する関東の土器文化など中部地域の弥生前期に併行する文化と、それぞれの地域で後続する中期前半期の文化である。それぞれの地域の土器文化や墓制については、ある程度の研究の蓄積があると考えられるが、その生業、とりわけ農耕との関連でこの時期・地域の資料を評価することは十分におこなわれていない状況にある。

したがって、中部地域各地の当該期の遺跡における、石器組成を中心とした道具の組み合わせ、稲関連資料、遺跡の立地と周辺環境などのデータを収集し、中部地域の「稲作情報の波及と定着のズレの時期の文化」を評価するための基礎資料を収集することを第一の目的とした。また、私がフィールドとしている静岡清水平野では、この時期の特異な遺跡立地や農耕関係資料が明らかになっており、さらに調査を加えることによって、この時期の生業形態の具体的なモデルを構築することができると考えた。このようなモデルを構築し、中部地域の農耕成立の具体的過程にアプローチする視点を獲得することを第二の目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、農耕形成期の具体像を明らかにするために、(1)農耕形成期の情報の収集、(2)中部地方における農耕形成のモデル構築の二つを基軸とした。

(1)農耕形成期情報の収集

①遺跡データの収集

分析対象となる遺跡および遺跡群について、農耕およびそれを含んだ生業についてのデータの収集をおこなった。遺跡の立地や性格に注意しながら、次の項目の情報を収集することとした。

- ・遺跡の立地と性格
- ・周辺の同時期遺跡との関係
- ・生業に関連する道具組成
- ・遺物の使用痕に関する情報
- ・道具の出土状態・使用法に関する情報
- ・植物資料（農耕関連）に関する情報
- ・動物資料に関する情報

等

②地域空間情報の把握

地域空間での遺跡のあり方と生業が深く関連すると考えられるため、

- ・遺跡の性格
- ・遺跡の位置
- ・遺跡の環境

などを地形、地理と結びつけた地図および地理情報を小地域毎に作成することとした。

③中部地方以外の比較資料の検討

中部地方以外の灌漑水田以前、もしくはその成立期の遺跡について資料収集することとした。

(2)中部地方農耕形成期のモデル構築

①静岡清水平野をケーススタディーとしたモデル構築

静岡清水平野では、当該期の遺跡が、丘陵部や丘陵裾部、低地部といった多様な環境に立地しており、それぞれの遺跡を評価し、関係性を導いていくことによって、中部地方における農耕形成期の一つのモデルを作り上げることができると考えられた。さらに以下の調査をおこなうことによって、このモデルを修正・補強することとした。

- ・丘陵部に展開する丸子佐渡山遺跡およびその関連遺跡の発掘調査
- ・低地部を中心とした既報告遺跡の資料調査
- ・採集品や未報告資料の報告資料化

②中部地方各地における遺跡群のモデル化

①の分析を参考にしながら、(1)で収集した資料を分析しながら、中部地域各地における農耕形成期の地域様相をモデル化していくこととした。

(3)総合・総括

(1)および(2)によって収集された情報および地域のモデルを比較検討し、中部地域各地の農耕形成がどのように進んだか考察を進める。また、そこに完成された灌漑型水田耕作がどのように導入されたかについても検討を進め、中部地方における農耕の形成過程について総括することとした。

4. 研究成果

(1)農耕形成期の情報収集

2006年度から2007年度にかけて、中部地方における農耕形成期の資料を収集するとともに、比較対象として列島各地の遺跡資料の巡検につとめた。出張を行って資料調査をおこなった地域は、静岡県内および愛知県、三重県、福井県、東京都、青森県、岩手県、宮城県等であった。

2008年度には、次に示す手越向山遺跡の調査・発見があり、その成果のまとめに重点を置いたため、これらのデータの集約は十分ではないが、以下のモデル作成や農耕形成の議論においてこれらの成果を適宜参考にした。

(2)手越向山遺跡の調査

静岡清水平野に位置する「稲作情報の波及と定着のズレの時期」の文化にあたる遺跡として、静岡市手越向山遺跡の調査を行った。この調査によって、この「ズレ」の時期にあたると思われる「畠状遺構」を検出したことは、列島の農耕形成を考える上でも極めて重要な成果となった。

①手越向山遺跡調査の概要

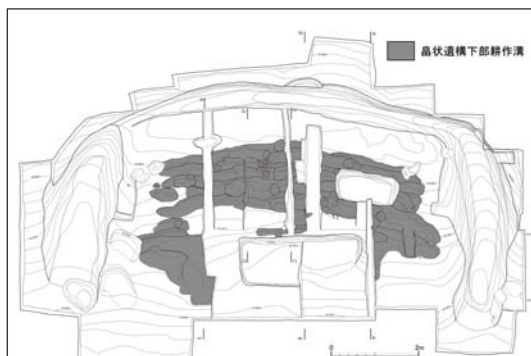
静岡市街の北西部に位置する佐渡山山頂

付近は、弥生中期初頭の丸子式土器の標識遺跡として知られる佐渡遺跡であり、大型の打製石斧を多く出土する初期の農耕と関連する遺跡と考えられた。2006年度から佐渡山の東側斜面に位置する手越向山遺跡の発掘調査を実施し、その後2008年夏までに4次にわたる調査を実施した。

調査地点は南に向けた斜面部分にあたるが、2007年度の第2次調査までに、北側および東西に溝をめぐらし、2基の主体部と墳丘盛土をもつ方形周溝墓1基を検出した。この周溝墓は、周溝出土土器の時期から弥生時代中期後半に構築されたものと考えられる。さらに、墳丘盛土の下層に人為的な造作を示す可能性のある黒色土の堆積が認められ、2008年の第3次および第4次調査によって、方形周溝墓下層に黒色土の覆土と耕作に関連する並列する浅い溝状の窪みからなる「畠状遺構」が広がっていることが明らかになった。

②畠状遺構の構造

畠状遺構は、方形周溝墓方台部下層の堆積土を削り込んで、等高線方向に並行する溝状の凹凸を残しながら形成される面を下面とし、その上部に黒色土の覆土を形成していることがわかった。この覆土は、クロボク土と地山の黄褐色土が混合した土として観察され、土壌を専門とする松田順一郎氏の観察によっても、総じて人為的に良く攪拌された土層であり、畠の耕作土である可能性が高いものと考えられるようになった。覆土下面は、字山面が斜面にそって等高線ラインに並行する溝状もしくは階段状の凹凸を残しながら削り取られている状況が明らかになったが、上部の覆土を耕作した際に下部の地山面が掘り返された結果であると考えられる。この覆土と下面構造が一体となって畠状遺構を構成していたが、これを検出できた範囲は方形周溝墓の墳丘が残されていた範囲に限られた。この覆土下部構造の検出範囲はおおむね東西7m、南北4mほどの範囲であった(下図)。



③畠状遺構の評価

検出された畠状遺構は、覆土の状況や下面の溝状の凹凸と一体となった構造から、畠である可能性が高いと考えられる。覆土の下層

に形成された溝状遺構群は、上部の黒色土を掘り起こして畠作土を造成する際に形成された耕作痕であると考えられる。一連の状況は、耕作に伴うさまざまな状況を示していると考えられるが、斜面地にあつて耕作土の流失を防ぐ目的や耕作土を改良するための工夫が加えられているものと考えられる。

畠状遺構の時期は、方形周溝墓が構築された中期後半以前であり、遺物は覆土上面付近で条痕文の壺形土器片1点を検出したのみである。また、畠状遺構の掘削具として佐渡遺跡周辺で採集されている大型の打製石斧が想起されるが、覆土下面で検出された掘削痕はこれとの関連が考えられる。このようなことから畠状遺構の時期は中期初頭の丸子式土器段階である可能性が高い。

回収した覆土については、植物遺体や炭化物の検出を進める予定であり、今後年代測定資料が得られる可能性も考えられる。畠状遺構の覆土については、古環境研究所の松田隆二氏に植物微化石の分析を、東大阪市鴻池新田会所管理事務所の松田順一郎氏に土壌の分析を依頼しておこなった。植物化石の分析については、化石の遺存状態は良くないものの、比較的乾燥した畑地の環境が考えられた一方、穀物類に関連するデータは得られなかった。土壌については、その後の顕微鏡観察およびX線分析においても畠の覆土として整合的な結果が得られている。

④調査の成果

手越向山遺跡では、弥生時代中期前半に遡る可能性の高い畠と考えられる遺構を検出した。これは、これまで知られていなかった本格的灌漑水田耕作定着以前の農耕の具体像の一端を明らかにしたものと考えられ、今後の列島農耕形成論に重要な成果をもたらすものと考えられる。

調査の成果については、『佐渡山周辺の考古学Ⅱ』および『同Ⅲ』として、調査の概要について報告を終えている。今後、分析の内容や考察を加味して、2010年度に正式報告書を刊行する予定である。

尚、本研究にかかわる調査として、2008年3月に富士宮市渋沢遺跡についても範囲確認を主な目的とした調査を行い、成果を得ている。

(3) 静岡清水平野の農耕形成のモデル

手越向山遺跡の調査成果により、佐渡山周辺および静岡清水平野の弥生時代前半期の遺跡資料についても再評価が可能になった。また、これまで中期中葉と考えられてきた本格的な農耕文化導入についても相対的な評価が可能になった。

弥生中期初頭丸子式期の農耕については、手越向山遺跡の畠状遺構や近隣のセイゾウ山遺跡、西山遺跡など居住域を伴った遺跡の

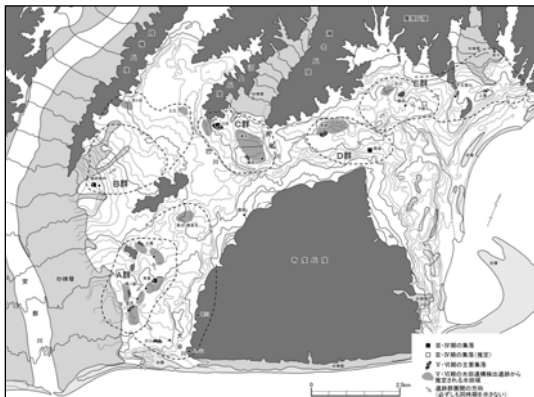
あり方から小規模な集団がある程度限定的な畑地の経営にあたったことを考えるようになった。また、静岡市瀬名遺跡などでは同時期に小規模な水田耕作を営んでいる可能性があり、当時の農耕のありかたとして「小規模集団がある程度選択的に各種の農耕形態を受容し、総体的に多様な農耕が展開した」と考えられるようになった。

一方、本格的な農耕形成については、神奈川県中里遺跡とその周辺の事例などを引きながら、小規模分散的な小集団が再編されて中期中葉の本格的農耕集落を営む集団が形成されるとする設楽博己氏の見方（設楽「東日本農耕文化の形成と北方文化」『稲作伝来』2005年）などがあるが、静岡清水平野でもある程度農耕について習熟した小規模集団が再編されて、本格的農耕が開始されるモデルを考えることができるようになった。

こうした構想の内容については、「本州中部地域における農耕形成の一つのモデルー静岡清水平野を事例としてー」としてまとめ、日本考古学協会 2008 年度愛知大会において報告した。

(4) 地形環境と農耕形成

本研究の過程では、遺跡の立地環境にも着目してデータの収集を行った。この中で、本格的な灌漑水田耕作を開始したと考えられる時期の遺跡の多くが、扇状地などの地形と関係する伏流水や小規模流路などの水環境と微傾斜地と関連して立地することがわかってきた。また、静岡清水平野の事例から、そのような周辺環境を媒体として遺跡群の展開が認められることも明らかになってきた。そこで、収集したデータのうち、特に静岡清水平野の資料について詳細な分析を進め、「静岡・清水平野における弥生遺跡の分布と展開」（『静岡県考古学研究』40号、2009年）として発表した。静岡清水平野において地形環境と関連しながら本格的な農耕集落が条件の整った各地に成立し、それぞれの地区で展開していく様子を復元することができた（下図）。



(5) 総括

日本列島中部地域の農耕形成期の資料収集と静岡清水平野を事例とした調査と農耕形成モデルの作成によって、同地域における農耕の成立過程についていくつかの知見を得ることができ、その成果を発表することができた。

特に、手越向山遺跡における畠状遺構の検出は、中・東日本における本格的な農耕形成以前の農耕のあり方をはじめ具体的に検出した事例として、きわめて学術的価値の高いものと評価される。こうした事例から、収集した資料の再評価を行い、モデル構築を行うことによって、農耕形成に関する今回のいくつかの論考を導き出すことができた。

手越向山遺跡の分析結果を含めた正式報告書の刊行や収集資料の集約など、いくつかの課題が残されているが、今後早い時期に取り組みしていきたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計7件）

- ① 篠原和太、静岡・清水平野における弥生遺跡の分布と展開、静岡県考古学研究、査読無、40号、2009年、校了
- ② 篠原和太、本州中部地域における農耕形成の一つのモデルー静岡清水平野を事例としてー、日本考古学協会 2008 年度愛知大会研究発表資料集、査読無、2008年、291-303頁
- ③ 篠原和太、遠江における農耕文化の成立と地域間の交流、静岡の歴史と文化の創造、査読無、2008年、37-60頁
- ④ 篠原和太、太平洋側（静岡県）、考古学ジャーナル、査読無、554号、2006年、25-28頁
- ⑤ 篠原和太、東海系弥生土器の関東への移動、公開研究発表会「異系統土器の出会いー土器研究の新しい可能性を求めてー」要旨集、査読無、2006年、67-73頁
- ⑥ 篠原和太、静岡県における弥生時代の集落と墓、中部弥生時代研究会第12回例会発表要旨集、査読無、2006年、40-49頁
- ⑦ 篠原和太、登呂式土器と雌鹿塚式土器ー駿河湾周辺地域における弥生時代後期の地域色に関する予察ー、静岡県考古学研究、査読無、38号、2006年、44-72頁

〔学会発表〕（計9件）

- ① 篠原和太、本州中部地域における農耕形成の一つのモデルー静岡清水平野を事例としてー、日本考古学協会 2008 年度

- 愛知大会、2008年11月8日、南山大学名古屋キャンパス
- ② 篠原和大、静岡市手越向山遺跡の調査をめぐる二、三の課題、静岡県考古学会中部例会、2008年2月16日、静岡市教育委員会長沼埋蔵文化財整理事務所
 - ③ 篠原和大、静岡清水平野における水田耕作の形成、南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター公開研究会、2007年10月28日、南山大学名古屋キャンパス
 - ④ 石黒立人・篠原和大・中山誠二・安英樹、集落、中部弥生時代研究会大会「中部弥生時代研究のこれから」、2007年6月17日、南山大学名古屋キャンパス
 - ⑤ 篠原和大、駿河湾周辺地域における弥生時代後期を中心とする装飾壺の変遷、静岡県考古学会プレシンポジウム「大廓様式の再検討」、2007年2月10日、韮山農村環境改善センター
 - ⑥ 篠原和大、静岡・清水平野における弥生農耕、第8回考古学研究会東海例会「弥生農耕と沖積低地の地形変化」、2007年2月3日、名古屋大学文学研究科
 - ⑦ 篠原和大、東海東部における周溝墓研究、シンポジウム『周溝墓研究の東西交流』2006年12月17日、南山大学名古屋キャンパス
 - ⑧ 篠原和大、東海系弥生土器の関東への移動、公開研究発表会「異系統土器の出会い—土器研究の新しい可能性を求めて—」、2006年11月26日、東京大学本郷キャンパス
 - ⑨ 篠原和大、静岡県における弥生時代の集落と墓、中部弥生時代研究会第12回例会、2006年7月2日、福井市立歴史郷土博物館

[図書] (計2件)

- ① 篠原和大 (編著)・五味奈々子、みどり美術印刷株式会社、佐渡山周辺の考古学Ⅲ 静岡市手越向山遺跡 (第3次・第4次) 発掘調査概要報告書、2009、45頁
- ② 篠原和大 (編著)、みどり美術印刷株式会社、佐渡山周辺の考古学Ⅱ 静岡市手越向山遺跡 (第1次・第2次) 発掘調査概要報告書、2008、35頁

[その他]

○報道関係情報

静岡市手越向山遺跡の発掘調査の成果について静岡新聞(2008年9月3日静岡版朝刊)、読売新聞・毎日新聞・産経新聞・中日新聞(各2008年9月4日静岡版朝刊)で報じられた。

○ホームページ等

調査の内容等については、以下のURLのホームページで随時公表した。

<http://www.ipc.shizuoka.ac.jp/~jsksino/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

篠原 和大 (SHINOHARA Kazuhiro)

静岡大学・人文学部・准教授

研究者番号：30262067

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし